

ありのままの自分を受け入れることを教えてあげる

本当は明るい子なのに、本当って誰?こんなお母さんがいました。「小学校低学年の頃は明るく素直な子供で、成績も悪くなかったんです。それが6年生になってからだんだん成績が下がり始め、塾に通わせたり、通信教材をやらせたりしているけれども、どうも効果がありませんでした。最近では、塾をやめてしまい、教材もほったらかしです。学校は何とか通っているけれど、家では私にほとんど口もきいてくれないんです。私は、特に甘やかしてるわけでもないし、特に厳しくしたわけではなく、辛い思いをさせた記憶もないし、いつも愛情を持って接しています。ごく普通の育て方をしたつもりなのに、こうなってしまうんです。どこが間違っていたんでしょうか。」

お母さんの言葉の中に、「本当は」明るいのに、「本当は」頭の良い子なのに、「本当は」素直な子なのに、と言うような表現が非常に多いことです。「親ごさんが愛していらっしゃるの、成績が悪くて反抗的な今の子さんですか、それとも明るくて素直で低学年の頃のお子さんですか」このお母さんは、今現在の自分の子供をありのままに受け入れることができていなかったんです。子供の成績が下がり始めた頃、お母さんは自分の子供がそんなはずではないと思いました。塾に通わせ教材を与えることで、自分の子供に戻そうと考えたのです。そのことを、子供が感じ取り、母親に受け入れられない状態の自分を、子供が受け入れることができるでしょうか。親の責任は重大です。子供に、自分を受け入れることを教えるためには、まず、親が子供をありのままに受け入れてあげなければいけません。親が子供を受け入れていないのに、口先だけであなたは「完璧でなくてもいいよ」といっても、子供はそのうそを敏感に感じ取りますから、返って逆効果になるでしょう。もちろん、親にとっても自分をありのままに受け入れることは難しいでしょう。それについては、「お母さんにも難しくてなかなかうまくできないんだけど」と言うように正直に伝えて構いません。むしろ親子の間でお互いを受け入れ合いながら、それぞれが自分自身を受け入れていくということが良い方法だと思います。



自分の欠点を子供と告白し合う

自分を好きになるためには、長所も欠点も含めたありのままの自分を受け入れることが必要です。欠点や自己不信、自尊心といった、子供が見たくないと思っている部分もはっきりと認めさせてあげましょう。特に子供によくありがちな貧弱な自尊心、特に「プライド」といったものは、自分の外の欠点に目をつぶらせ、ありのままの自分を見ることに対して、邪魔をするといってもいいかもしれません。この「プライド」の扱いには、充分気をつけなければなりません。大人から見れば確かにつまらないプライドかもしれませんが、子供にとっては、それをつぶされる事は、人格を否定されることに等しいことでもあります。小さい頃からピアノを習っていて、周りの人からいつも上手と褒められていて、

自信を持っている女の子がいました。音楽会などで合唱の伴奏を引き受けるほどで、弾いた結果、その女の子ではなく他の小学校から転校してきた子供が選ばれました。女の子はピアノを辞めると言い出しました。女の子の言い分は、「相手の子も下手じゃなかったけれど、絶対自分の方がうまかった。先生が自分を選ばなかったのは、えこひいきだ。どんなに練習して上手になっても、えこひいきばかりならもうピアノなんか弾きたくない」彼女の気持ちを推測すれば、もし次の機会にも選ばれなかったらどうしよう、と不安になっているのでしょう。誰かに負けるなどと言う事は、それこそプライドが許さない。だからその前にやめてしまったほうがいい。これが本音でしょう。もし、あなたがこの女の子の親だったら、なんと行ってあげますか。上には上がいる、また、今度頑張ればいいじゃないか、といった言葉は結果的に子供の演奏が劣っていたことを認めることになりまますから、子供のプライドはますます傷ついてしまい、女の子の言い分を肯定してしまうのは、子供のプライドを満足させてあげることができませんが、先生の信頼を失わせてしまうと言う点では、いいとは言えません。子供は、心の底ではそれがつまらないプライドだと知っています。子供だって上には上があると言う事は充分わかっています。



でも、それがつまらないものだとして認めてしまうと、その元となっている自分で自信がある部分について、自信を失うことになります。この女の子の場合、ピアノの演奏そのものに対する自信を失わせないように、役に立たないプライドを持っている、と言うことを認めさせてあげる必要があります。「相手の子がうまいかどうかは、演奏を聞いてないからわからないけど、あなたがとっても上手だと言う事はお母さんは知っている。あなたが、自信を持つのは当然だと思う。今回のことで、その自信をなくしているのかもしれないけれど、あなたがピアノを止めてしまって、みんながせっかくあなたの演奏を聴けなくなってしまったら、もっと残念だ。3年後に大きな発表会で拍手を受けていると、ピアノを辞めたことを後悔してるのと、どっちがいい？」あるいは、「ピアノは何のために弾いているのか。コンクールや賞に選ばれることだけが目標になっていると、なれなかったとき、とれなかったときは、とても悔しい思いをしてしまうよ。もともと、ピアノを弾きたいと思ったのはどういう思いからだった？ピアノを弾くことが好きだからということではなかったかな。その好きなピアノを弾くことで、だんだんと上手になっていくと、次は人に聞いてもらいたいという思いが出てくるよね。その先に、コンクールに選ばれるとか、賞をとることにつながっていくと思う。でもそれがもともとの目的ではなかったの？」など、こんな風に言ってあげたら、その子どもも自分の演奏に対する自信を失わず、プライドを持っていることを認めることができ、そのプライドが必要ないことも理解できるでしょう。また、子供が自分で見たくない部分を認めさせるときのコツとして、お母さんが先に、自分のことを話してしまうのも良いでしょう。「お母さんの欠点は、人の話をよく聞かないで、すぐかっとなってしまふこと。直そうと努力はしているけれども、なかなかおらない。あなたの短所はどこだと思う」と言うように話し方をすると、子供は「お母さんだって自分の中に嫌なところがあるんだ」とわかって、安心して素直に自分の嫌な面を見ることができるようになります。